レコ芸 1/3
'18/12

平成27年
パーヴォがNHK響と初録音

世界標準に到達した日本のオーケストラ

■東条碩夫

英・独・仏の評論家と対決

少し前になるが、「日本オーケストラ連盟」が英・独・仏・米の評論家を招き、いくつかの日本のオーケストラの定期公演を聴かせ、感想を述べさせるパネル・ディスカッションを開催したことがある。「忌憚なく」という要望を真に受けた彼らは、欧州のオケに比べ演奏会のレパートリーが狭すぎるとか、演奏にメリハリがないとか、各パートのソロに自己主張が乏しいとか、言いたい放題のコメントを並べていた。

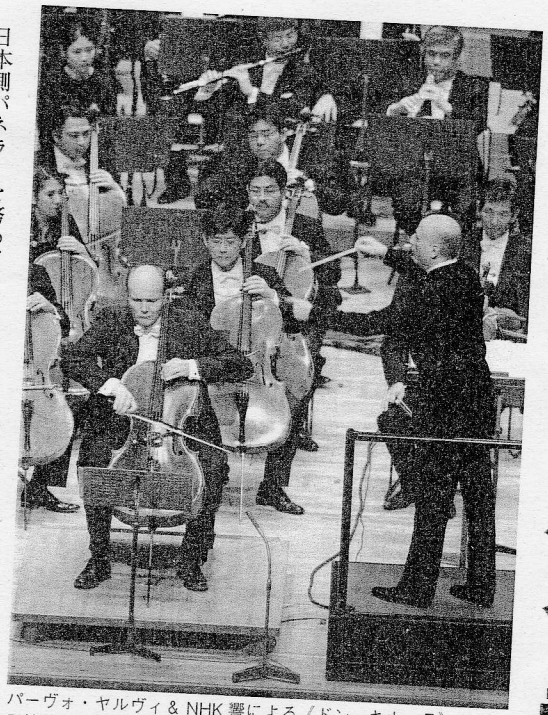
シベリウス：交響曲第4番，同第5番
尾高忠明指揮 札幌so
〈録音：2014年2, 3月, 2015年2月（L）〉
［フォンテック Ⓓ FOCD6048］CD&SACD
＊1998～2015年（平成10～27年）に常任指揮者（2004年からは音楽監督兼任）を務め、札響の演奏水準を高めた尾高忠明の得意のレパートリー、シベリウスの交響曲。そのツィクルスのライヴ録音は計4枚（分売）で出ているが、中でも特に優れた1枚がこれだ。いずれも本拠地たる札幌コンサートホールKitaraでの熱気あふれる演奏。

モーツァルト：交響曲全集
飯森範親指揮 山形so
〈録音：2007年8月～2016年11月（L）〉
［EXTON Ⓓ OVCL00630（15枚組）］CD&SACD
＊日本人指揮者と日本のオーケストラによる初のモーツァルト交響曲全集（収録曲53曲）としての意義も大きい。飯森範親は2004年（平成16年）に常任指揮者として迎えられ、2007年（平成19年）には音楽監督となり、それまで地味だったこの楽団のイメージを大きく変えた。山形テルサホール他で10年にわたり積み上げたライヴ録音には活気がある。

R. シュトラウス：交響詩《ドン・キホーテ》，同《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》，《ばらの騎士》組曲
パーヴォ・ヤルヴィ指揮 NHKso，トゥルルス・メルク（vc）佐々木亮（va）
〈録音：2015年10月（L）〉
［RCA Ⓓ SICC19020］CD&SACD
＊2015年（平成27年）にパーヴォ・ヤルヴィが首席指揮者となって以降、NHK響の定期公演におけるレパートリーにもやや拡がりが生じ、オーケストラのイメージにも新鮮な雰囲気が生まれてきた。これは彼の首席指揮者就任記念定期のライヴ録音。当日の会場に漲っていた新時代の到来に沸き立つ雰囲気が、このディスクからも伝わってくる。

メシアン：歌劇《アッシジの聖フランチェスコ》全曲
シルヴァン・カンブルラン指揮 読売日本so，新国立劇場cho，びわ湖ホール声楽Ens. 他
〈録音：2017年11月（L）〉
［Altus Ⓓ ALT398-401（4枚組）］
＊この長大な作品の全曲日本初演という記念的な演奏会のライヴ。これは2017年（平成29年）の国内音楽界最大のイヴェントであった。作品の価値、上演の意義はもちろん、常任指揮者カンブルランの全身全霊を籠めた情熱の指揮、読売日本響の柔軟な対応力に富む演奏など、全てが結実した完璧な演奏。全曲ディスクとしてもこの上なく貴重なものである。

日本側パネラーを務めていた筆者は少々腹に据えかねて、東京のオケが定期公演でいかに意欲的なプログラムを組み、現代音楽をも積極的に取り上げているかを、さまざまな例を挙げて反証し、――演奏がなだらかな音楽になるとすれば、それはおそらくなだらかに発音される日本語の特質が反映されているのであり、



パーヴォ・ヤルヴィ＆NHK響による《ドン・キホーテ》／チェロはトゥルルス・メルク（写真提供：NHK交響楽団）

またアンサンブルを重視する演奏は、自己主張するよりも常に全体の調和を優先するという日本人の性格が知らず知らずのうちに反映されているのだ、同じベートーヴェンの交響曲を手がけても、各国のオケによりさまざまにスタイルが異なるように、日本のオケが独自のカラーを持つのは不思議ではない、とした上で、いつの日か「日本スタイルのベートーヴェン」も世界で市民権を得ることになるであろう、とやり返した。

英・独・仏の評論家はなんとなく首をかしげていたが、私の隣に座っていたアメリカの評論家だけは、「おれは君の意見に賛成だ」と私にささやいた。確かにアメリカの演奏者たちも、欧州クラシック界の伝統と対決せざるを得ない立場にあるのだから――。

日本のメジャー・オーケストラ

話は多少飛んだかもしれないが、そのような特質についての議論を含みつつも、とにかく日本のオーケストラの演奏水準は、特に今世紀に入ってから、いっそう目覚ましいものになった。もちろん、あれこれムラがあるのは事実としても、1970年代あたりの水準と比べれば、もはや比較するのも愚かと言っていい。来日する名ばかりの「本場のオケ」よりも、概して日本の楽団の演奏の方が、よほどレパートリーも広く、演奏の密度も高いことは、実際に聴いてみれば納得がいくはずである。

今日、日本オーケストラ連盟に加入

レコ芸 '18/12 2/3

している楽団は、正会員オーケストラは25団体、準会員は11団体ある。たとえば2016年4月～17年3月（平成28年度）のデータによれば、正会員すなわち所謂メジャー・オケの年間公演総数は3105回（単純計算で言えば、全国で1日平均8・5公演が行なわれていることになる）で、総入場者数は延べ389万9539人に上る（1公演平均1256人ということになる）。

ここでは、日本のオーケストラにあまり興味を持っていない方も少なくないと思うので、とりあえず正会員オケだけでも、一言紹介してみたい。

北海道では、札幌響が唯一のプロ・オーケストラで、老練バーメルトが首席指揮者を務めている。東北では、仙台フィルが常任指揮者として飯守泰次郎を擁し、一方山形響では飯森範親が音楽監督として人気を誇る。

東京では、NHK響が首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィのもとで不動の実力を誇り、カンブルランを常任指揮者に擁する読売日響も優れた企画と演奏水準でこれに拮抗。東京響は音楽監督ジョナサン・ノットのもとで、また東京都響も音楽監督・大野和士のもとで、日本フィルも首席指揮者ピエタリ・インキネンとともに、それぞれ好企画と高水準の演奏を競い合っている。東京フィルは首席指揮者バッティストーニの熱血的指揮で人気を集め、新日本フィルは音楽監督・上岡敏之により個性的な味を増した。東京シティ・フィルも常任指揮者・高関健の下で演奏水準を高めており、内藤彰が芸術監督を務める東京ニューシティ管は珍しい版の日本初演が看板だ。また首都圏のオケとしては、群馬響では大友直人が音楽監督として手堅くオケをまとめ、神奈川フィルは若い川瀬賢太郎が常任指揮者に就任して爽やかなイメージを生み出した。

中部・北陸ではオーケストラ・アンサンブル金沢がミンコフスキを芸術監督を迎えて新たな路線を開拓中。名古屋フィルは小泉和裕を音楽監督に招いてオーソ

ジョナサン・ノット
（写真提供：東京交響楽団）

シルヴァン・カンブルラン
©読売日本交響楽団

アレクサンドル・ラザレフ
©堀田力丸（写真提供：日本フィルハーモニー交響楽団）

エリアフ・インバル
©堀田力丸（写真提供：東京都交響楽団）

マーラー：交響曲第10番～アダージョ，ブルックナー：交響曲第9番
ジョナサン・ノット指揮 東京so
〈録音：2018年4月（L）〉
［EXTON Ⓓ OVCL00668（2枚組）］CD&SACD

＊2014年（平成26年）に音楽監督となったジョナサン・ノットも、東京響と理想的な関係をつくり上げている。プログラミングも巧みだ。〈アダージョ〉は、鋭角的な厳しさを備えた演奏、コールス版使用のブルックナーの9番（補訂完成した第4楽章は演奏されていない）は激しい感情の沸騰。ノットと東京響の快調さを実証する最良の1枚。

マーラー：交響曲第7番《夜の歌》
エリアフ・インバル指揮 東京都so
〈録音：2013年11月（L）〉
［EXTON Ⓓ OVCL00517］CD&SACD

＊インバルがプリンシパル・コンダクターを務めていた時代（2008～14年／平成20～26年）の都響は、まさに鉄桶のごときバランスを誇ったオケだった。これは2013年11月のライヴで、ミステリアスな要素と爆発的な「躁」の性格とを混在させたこの交響曲を完璧な均衡の構築に仕上げるという、インバルならではの大技を発揮させた演奏。

R.シュトラウス：交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》，同《英雄の生涯》
上岡敏之指揮 新日本po，崔文洙（vn）
〈録音：2016年9月（L）〉
［EXTON Ⓓ OVCL00621］CD&SACD

＊2016年（平成28年）9月に音楽監督となった上岡敏之は、その就任記念定期の幕を、最も得意とするR.シュトラウスの作品で切って落とした。これがその当日の演奏を録音した1枚である。上岡の音づくりは極めて個性的な音色を持っており、その全貌を録音で再現するのは至難の業だが、演奏のしなやかな雄弁さは充分に伝わってくる。

ショスタコーヴィチ：交響曲第4番
アレクサンドル・ラザレフ指揮 日本po
〈録音：2014年10月（L）〉
［EXTON Ⓓ OVCL00568］

＊ロシアの「猛将」ラザレフが首席指揮者を務めた時代（2008～16年／平成20～28年）、日本フィルは劇的に変貌を遂げた。以前のこの楽団からは想像もできないほど、アンサンブルは完璧に整備され、表現力の幅広さも画期的に増大した。ロシアものはどれも良いが、ここではとりあえず、火を吐くような激しさにあふれた演奏のショスタコーヴィチ4番を挙げておく。

ストラヴィンスキー：バレエ《春の祭典》，バーンスタイン：《ウェスト・サイド・ストーリー》～〈シンフォニック・ダンス〉
アンドレア・バッティストーニ指揮 東京po
〈録音：2017年5月，2014年1月（L）〉
［デンオンⒹ COCQ85378］

＊2016年（平成28年）秋から東京フィルの首席指揮者を務めるバッティストーニは、オペラに演奏会にと縦横の活躍だ。その獅子奮迅の指揮ぶりも印象的だが、熱血的な音楽づくりも人気の的になっている。この《春の祭典》は彼の芸風をよく顕わした演奏と言えよう。単に咆哮するだけでなく、随所に綿密な設計を施す感性もなかなかのもの。

レコ芸 '18/12 3/3

ドックスなカラーを復活、セントラル愛知響も新鋭・角田鋼亮の常任指揮者就任（来春）でフレッシュなイメージ転換を狙う。

関西以西では、まず広上淳一が常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザーとして率いる京都市響が関西随一の演奏水準を誇り、かたや大阪フィルは尾高忠明を音楽監督に迎えて安定した合奏力を強化させた。大阪響ではヴェテランのミュージック・アドヴァイザー外山雄三が真摯な演奏を主唱、日本センチュリー響も首席指揮者・飯森範親が意欲的な企画で存在感を出し、関西フィルは音楽監督オーギュスタン・デュメイの「弾き振り」を交えた選曲で特色を出している。兵庫芸術文化センター管弦楽団はアカデミー生のオケではあるが、芸術監督・佐渡裕の人気で常に満員の聴衆を集めるという異色の存在だ。

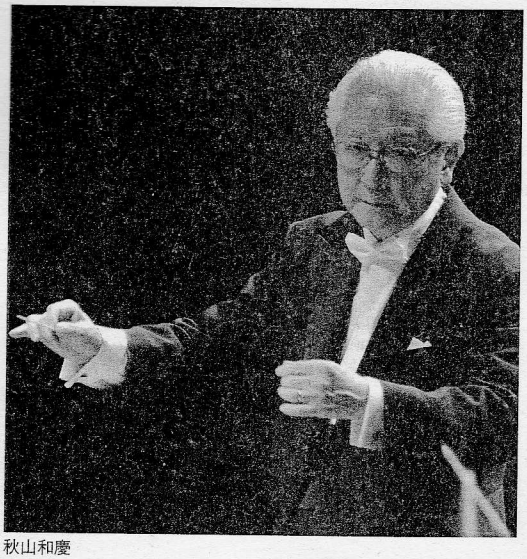
そして広島響は下野竜也が音楽総監督となり、彼らしい凝った選曲で気を吐き、一方九州響は小泉和裕を音楽監督に迎えて正統路線を貫いている——。

レコーディングのクオリティが向上

というわけだが、これらのオーケストラは、一部を除いて、特に平成になってからはレコーディングに活発な姿勢を示しているところが多い。ただ、レコード会社としては、オケの人気というより指揮者の人気でラインナップを編成する傾向もあるようだが。

そして、これは近年の欧米のオーケストラ録音にも共通することだが、スタジオ・レコーディングよりも演奏会でのライヴ録音が圧倒的に多い。昔は、ナマ演奏はミスが多くなるという理由で、レコードはスタジオ録音——という考えが主流だったが、日本のオケの場合、それは概して演奏が慎重になり過ぎ、生気が無く、面白味が無いという欠点を生んでいたのは周知の事実である。今日では演奏技術も向上したおかげで、ミスはほとんど無いし、あっても容易く修正可能である。録音も奥行感、重量感、スケール感が豊かになり、マスタリングの技術も向上して、ホールの「雰囲気のある」音響を再現させることも容易くなった。今や、すべてが整って来ている状況にあると言えるだろう。

広上淳一


秋山和慶

ショスタコーヴィチ：交響曲第7番《レニングラード》
川瀬賢太郎指揮 名古屋po＆神奈川po
〈録音：2016年6月（L）〉
［フォンテックⓓ FOCD9775～6（2枚組）］
＊川瀬賢太郎は2011年（平成23年）から名古屋フィルの指揮者を務め、2014年（平成26年）からは神奈川フィルの常任指揮者を兼任している。その両団体を結集させて挑んだのがこの《レニングラード》。横浜と名古屋で演奏したが、このディスクは横浜での演奏の記録だ。筆者が会場で聴いた時と同様、少し細身の響きだが、俊英指揮者と2楽団の熱演の貴重な記録。

R.シュトラウス：交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》，《ばらの騎士》組曲 他
広上淳一指揮 京都市so
〈録音：2012年7月，2013年3月（L）〉
［ロームⓓ KSOL1004］
＊京都市響の演奏水準は西日本随一、全国でもベスト3に入るほどではないかと筆者は思っている。2008年（平成20年）から常任指揮者を務める広上淳一の功績は大きい。このディスクに入っているR.シュトラウスの作品の演奏からもそれは窺えよう。重量感、スケール感、演奏の濃密さなど、筆者が京都コンサートホールで聴いた印象そのままだ。

ショスタコーヴィチ：交響曲第11番《1905年》
井上道義指揮 大阪po
〈録音：2017年2月（L）〉
［EXTONⓓ OVCL00627］
＊井上道義の大阪フィル首席指揮者在任は2014～17年（平成26～29年）と短かったが、印象的な演奏をいくつか残した。このショスタコーヴィチ11番は、在任中最後の定期公演で指揮したもの。1905年の「血の悲劇」と、その犠牲者への追悼が入魂の演奏で描かれる。録音に新しいフェスティバルホールの空間的な拡がり感、といったものがもう少し取り入れられていれば。

ハイドン：交響曲第6番《朝》，同第17番，同第35番
飯森範親指揮 日本センチュリーso
〈録音：2015年6月（L）〉
［EXTONⓓ OVCL00610］
CD&SACD
＊2014年（平成26年）春から首席指揮者となった飯森範親は、山形響でのモーツァルト交響曲ツィクルスの成功例を応用し、連続企画としてハイドンの交響曲連続演奏を開始した。その第1回公演のライヴ録音がこれである。演奏と録音の仕上がりの良さは驚くほどだ。ブラインド・テストで聴いたら、欧州のオケの演奏かと思われるかもしれない。

チャイコフスキー：マンフレッド交響曲 他
秋山和慶指揮 九州so
〈録音：2009年11月（L）〉
［フォンテックⓓ FOCD9463］
＊九州響が秋山和慶をミュージック・アドヴァイザー兼首席指揮者に戴いていたのは2004～13年（平成16～25年）。オーケストラのアンサンブルを整える手腕では第一人者と定評のある彼のもとで九州響が聴かせたのがこの《マンフレッド交響曲》だ。ロシア的な情感にも不足はない。本拠地アクロス福岡シンフォニーホールの良い音響特性を生かした録音。